



阿寒摩周国立公園満喫プロジェクト ステップアッププログラム 2025

2021（令和3）年 2月策定

阿寒摩周国立公園満喫プロジェクト地域協議会



はじめに

2016（平成 28）年 3 月に、政府により「明日の日本を支える観光ビジョン」がとりまとめられ、訪日外国人旅行者数を 2020（令和 2）年までに 4,000 万人とすることが新たな目標として掲げられた。同ビジョンでは「日本の国立公園を世界水準の“ナショナルパーク”としてブランド化を図る」ことが重要な取組の柱として掲げられ、それを受け環境省により「国立公園満喫プロジェクト」（以下、「満喫プロジェクト」という。）が立ち上げられた。

満喫プロジェクトでは、訪日外国人を惹きつける取組を計画的・集中的に実施し、2020（令和 2）年までにそれまでの 2 倍以上の 1,000 万人に増やすことが目標とされた。この目標を達成するため、全国の国立公園の中で先行的・集中的な取組を実施する国立公園の一つとして、阿寒摩周国立公園が選定され、阿寒摩周国立公園満喫プロジェクト地域協議会において 2016（平成 28）年度から 2020（令和 2）年度までの 5 年間を計画期間とした“ロードマップ”として阿寒摩周国立公園満喫プロジェクトステップアッププログラム 2020（以下「ステップアッププログラム」という。）を策定し、それに基づき関係機関で連携しながら取り組みを進めてきたところである。

しかしながら、2019（令和元）年末から徐々に感染が拡大している新型コロナウイルスの影響で、訪日外国人の旅行は激減し、国内旅行も今後の見通しが立たない状況が続いている。いずれ回復すると想定される観光需要への準備を進めるととともに、この間にウィズコロナ・ポストコロナ時代の新たな観光スタイルに地域として対応していくことが求められている。

満喫プロジェクトについては、2021（令和 3）年以降も継続し、新たな展開を図っていくという方針が示されており、新型コロナウイルス感染拡大の影響を乗り越えながら、国立公園の新たな価値を提供しつつ、新型コロナウイルス終息後のインバウンド復活を見据えて、受け入れ環境整備等を着実に進めていく必要がある。

目 次

はじめに

1. 現状	1
(1) 阿寒摩周国立公園の特徴	1
(2) 阿寒摩周国立公園の利用の現状	5
(3) 2020 年までの主な取組成果	10
(4) 今後の課題	15
2. 基本方針	19
(1) 基本的な考え方	19
(2) 利用推進の方向性	20
(3) 取組の方針	21
(4) ターゲット	22
3. 目標	24
4. 行動計画	28
(1) 重点的な取組	28
(2) 個別の取組	34
5. 効果検証及び取組の改善	34
(1) 進捗状況の確認	34
(2) 取組へのフィードバック	34

1. 現状

(1) 阿寒摩周国立公園の特徴

阿寒摩周国立公園は、「火山と森と湖」が織りなす雄大な景観を有する国立公園である。現在も噴気活動が続ける火山性の山々、それらを包むように広がる天然林、山麓には阿寒湖、摩周湖、屈斜路湖に代表される湖が点在する。その豊かな自然の中で希少種を含む多くの野生動植物が育まれ、公園内の各地で、それぞれ特徴的な温泉が湧出している。公園内にはアイヌコタンがあり、アイヌ民族の伝統文化が伝承継承されている。

このような「原生的な自然」を舞台に、季節ごとに利用者のニーズなどに応じて、登山やトレッキング、森林散策、ドライブ、カヌー、釣り、スキー、キャンプ、温泉浴など様々な利用が進められている。



イソツツジと硫黄山



神の子池



屈斜路湖の雲海



摩周湖



オンネトー



雌阿寒岳



阿寒湖温泉



阿寒湖のマリモ



アイヌ古式舞踊

＜阿寒摩周国立公園 data＞

指定年月日	1934（昭和 9）年 12 月 4 日 ※2017（平成 29）年 8 月 8 日に「阿寒国立公園」から名称変更
公園面積	91,413ha
火山地形	阿寒湖カルデラ、屈斜路カルデラ（日本最大級の規模） 雄阿寒岳（1,371m）、雌阿寒岳（1,499m）、藻琴山（1,000m）、硫 黄山（508m）
湖沼	阿寒湖、摩周湖（世界有数の透明度）、屈斜路湖、オンネトー、 神の子池
植物	トドマツ、エゾマツ、イソツツジ、メアカンキンバイ、 阿寒湖のマリモ（国指定特別天然記念物）
動物	ヒグマ、エゾシカ、キタキツネ、エゾタヌキ、エゾリス クマゲラ、オジロワシ、シマフクロウ、オオハクチョウ
温泉	阿寒湖、雌阿寒、川湯、仁伏、砂湯、池の湯、コタン、和琴、 オンネトー湯の滝（国指定特別天然記念物）
文化	アイヌ文化



池の湯



カヌー



エゾツツジ



まりも祭り



双湖台



西別岳



屈斜路湖



キタキツネ



オンネトー湯の滝

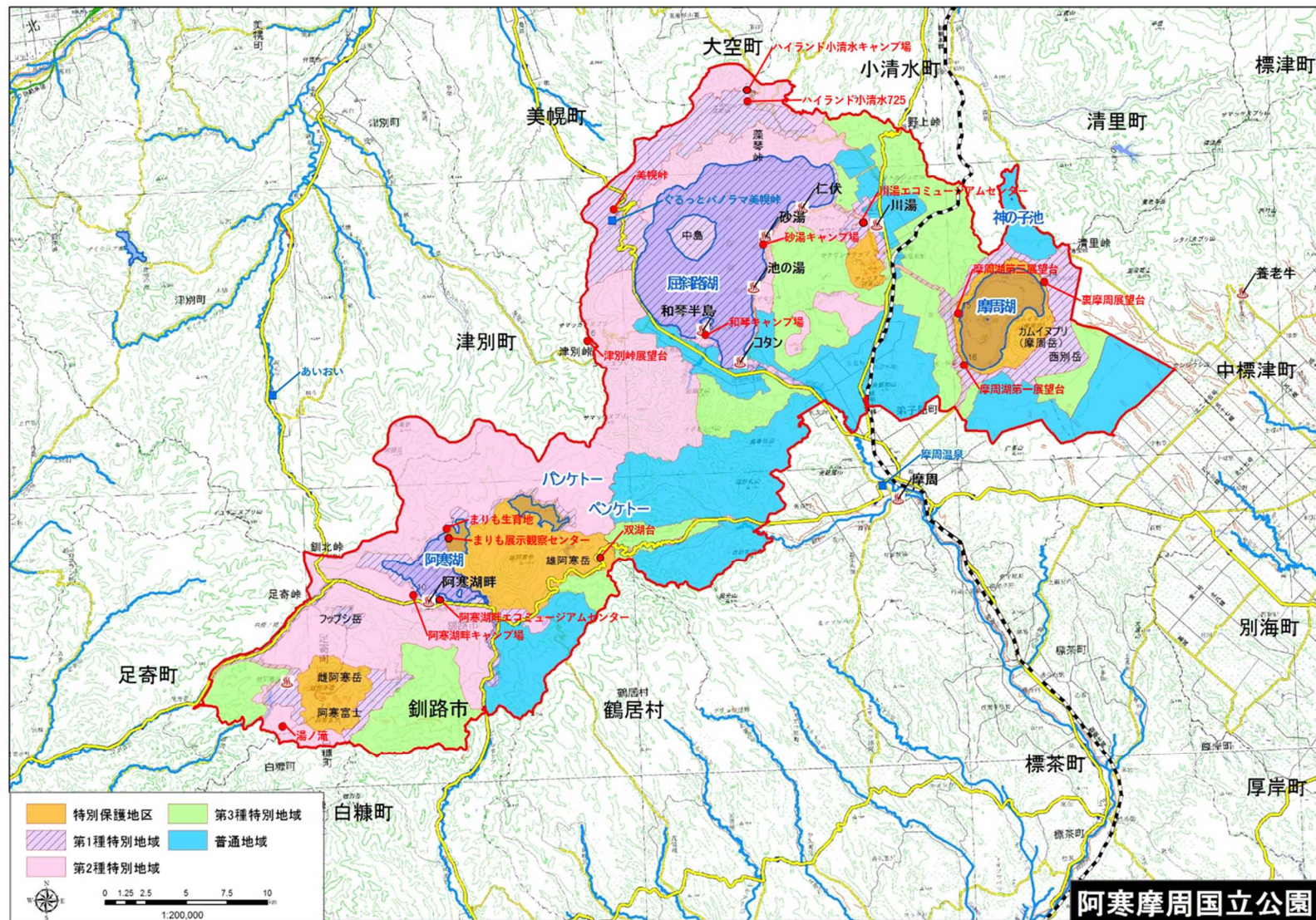


図1 阿寒摩周国立公園区域図

(2) 阿寒摩周国立公園の利用の現状

1) 国立公園の利用者数

阿寒摩周国立公園の利用者数は、調査が開始された 1971（昭和 46）年から増加を続けてきたが、1999（平成 11）年の 786 万人をピークに、以降は減少傾向にある。2016（平成 28）年の利用者数は、356 万人であった。周辺の国立公園と比較して最も利用者数の多い国立公園であるが、1999（平成 11）年以降の減少傾向は最も激しい。（図 2）

阿寒摩周国立公園の主要な宿泊地である阿寒湖温泉及び川湯温泉の利用者数、宿泊者数の長期的な推移をみると、1990 年代までは阿寒湖温泉と川湯温泉の利用者数はほぼ同等程度であったが、川湯温泉は 1991（平成 3）年に宿泊者数のピーク（約 56 万人）を迎え、以降は減少を続け、現在では 10 万人程度まで落ち込んでいる。阿寒湖温泉は 1998（平成 10）年に宿泊者数のピーク（約 103 万人）をむかえた後、2010（平成 22）年頃までは減少傾向が続き、その後は 50～60 万人程度で推移している。（図 3）

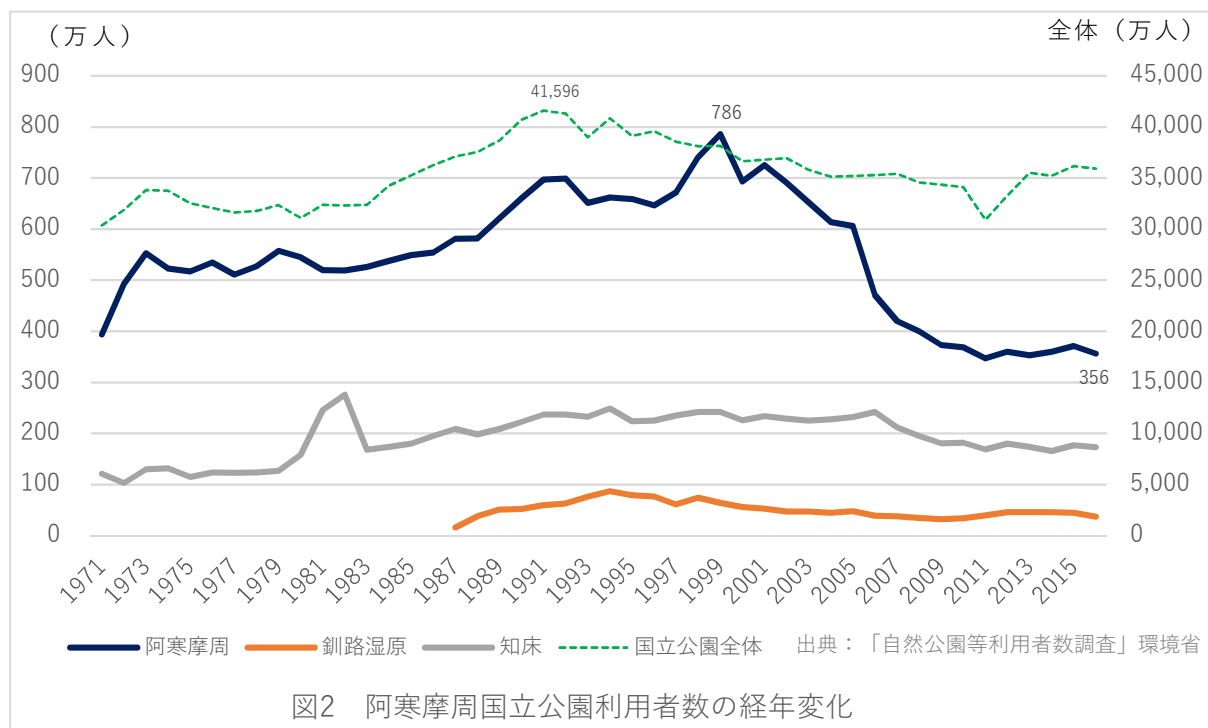


図2 阿寒摩周国立公園利用者数の経年変化

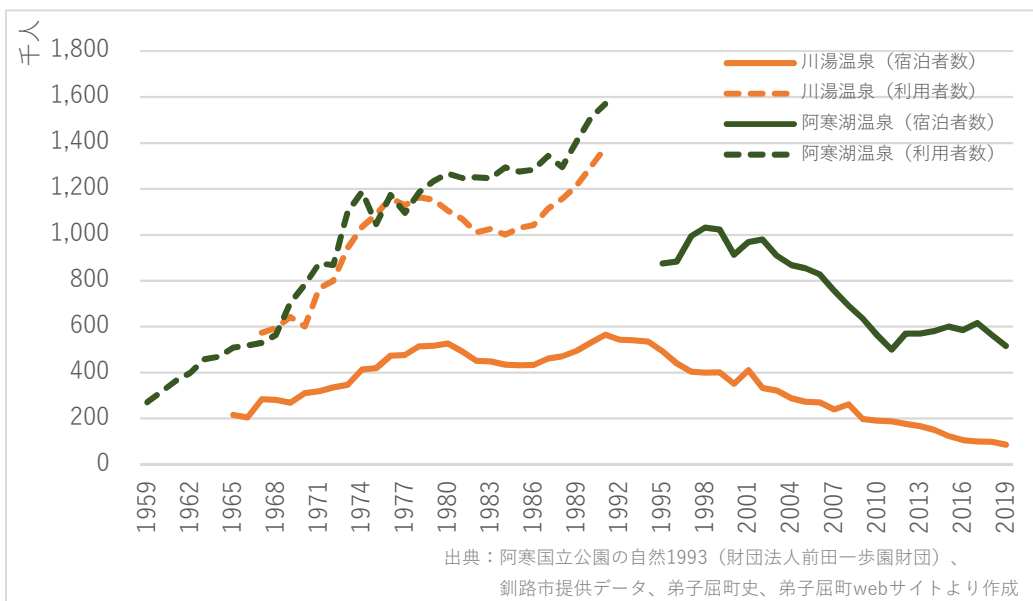


図3 阿寒湖温泉及び川湯温泉の利用者数・宿泊者数の推移

2) 訪日外国人利用者の現状

阿寒摩周国立公園の訪日外国人利用者数の推計値では、2015（平成 27）年の 6.3 万人から、2019（令和元）年の 5.1 万人と減少しているが、利用者数については推計方法に課題があり、観光統計として一般的に用いられている延べ宿泊者数で現状を把握する方が適切と考えられる。

宿泊利用者の多くを占める阿寒湖温泉（旧阿寒町）及び弟子屈町の訪日外国人延べ宿泊者数の推移をみると、阿寒湖温泉については満喫プロジェクト開始前から急速に訪日外国人が増加しているが、2015（平成 27）年以降は 10 万人から 12 万人程度で推移している。一方、弟子屈町の訪日外国人利用者数は若干の増加傾向が続いている。（図 4）

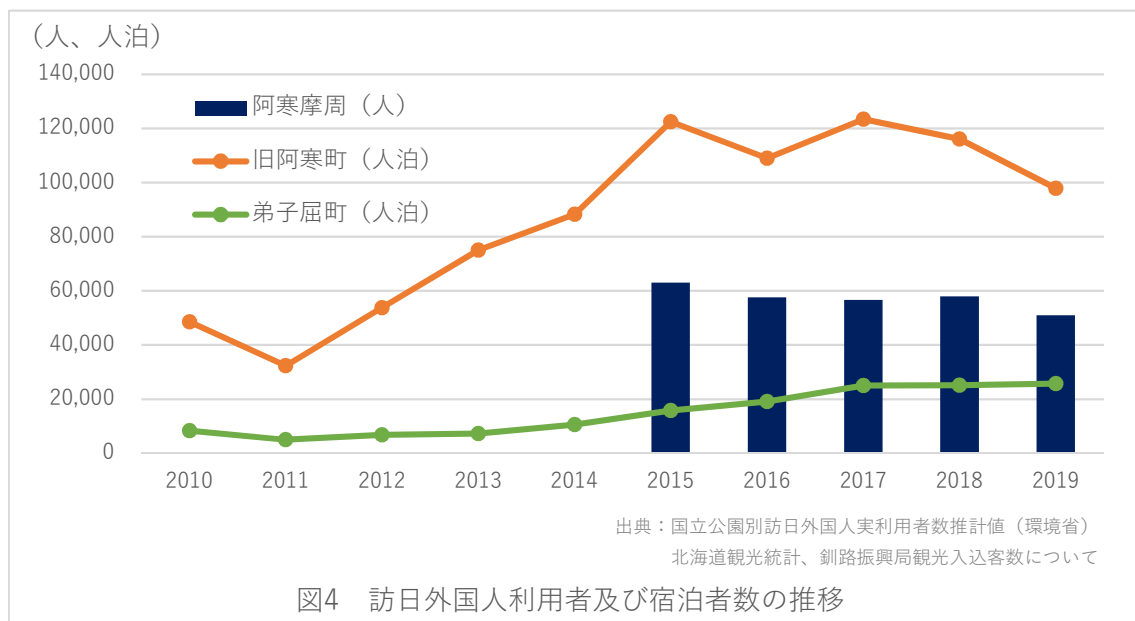


図4 訪日外国人利用者及び宿泊者数の推移

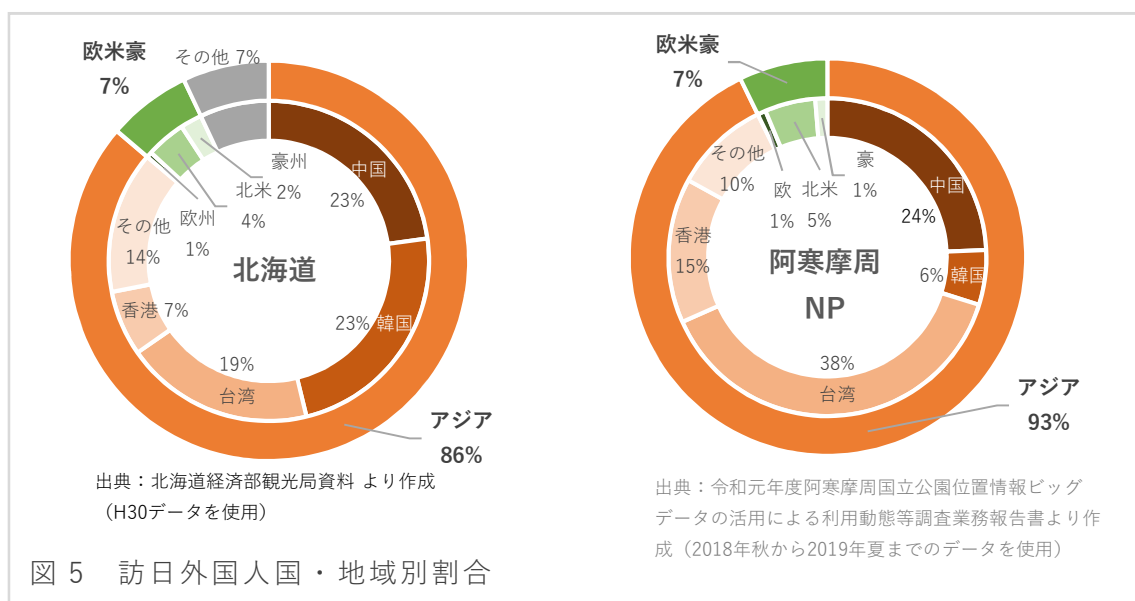


図 5 訪日外国人国・地域別割合

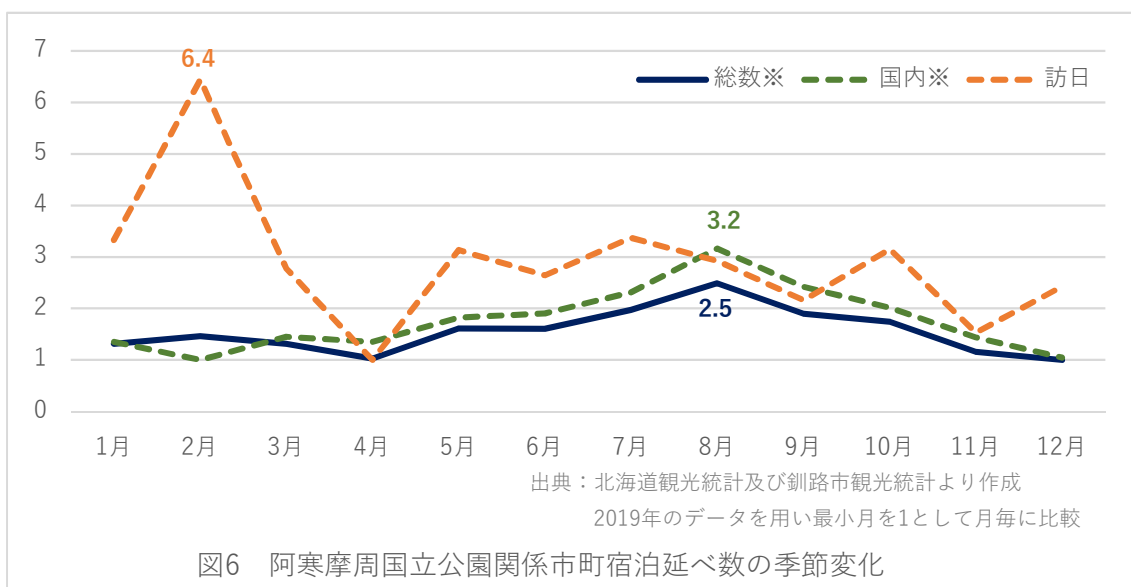
国・地域別に見ると、阿寒摩周国立公園はアジアの割合が大きく特に台湾からの入り込みが多いことが特徴である。北海道の訪日外国人の国別割合では韓国が多いが、阿寒摩周では6%程度にとどまっている。欧米豪の割合は現在7%程度であるが、年々着実に増加しつつある。(図5)

3) 国立公園利用者数の季節変化

阿寒摩周国立公園を訪れる利用者の季節変化を比較すると、訪日外国人では2月が最も多く、国別割合の約9割を占める中国、台湾、韓国等のアジア圏では、旧暦の正月が春節という祝日にあたり、その前後の大型連休を利用する旅行者が多いことが要因と考えられる。また、比較的温暖な気候の地域が多いアジア圏ではなかなか見られない雪景色を目当てに来る旅行者も多いと考えられる。

一方で、国内旅行では8月が最も多いが、2月が最も少ないのが訪日外国人の動向とは対称的である。北海道全体では、冬は夏に次いで観光客の多いシーズンであることと比較しても、本国立公園の冬の国内旅行の少なさは特徴的である。

訪日外国人と国内旅行を含めた総数で比較すると、国内旅行と同様に8月が最も多いが、国内旅行の少ない2月は訪日外国人に牽引されてある程度の旅行者数を確保できている。国内旅行だけだと最小月と最大月は3倍以上の差があるが、訪日外国人を含めた総数で比較すると2.5倍にとどまっており、訪日外国人旅行が繁閑差の解消につながっている。(図6)



4) 旅行の質に関する指標

満足度、支出額、宿泊数、リピーター率等の旅行数だけではない旅行の質に関する指標について、国立公園を訪れた旅行者に実施したアンケート調査によると、阿寒摩周国立公園では満喫プロジェクトに先行的・集中的に取り組む8公園の平均に近いか少し上回る結果となった。(表1)

表1 阿寒摩周国立公園訪問者の旅行の質に関する指標

	阿寒摩周		8公園平均		
	外国人	日本人	外国人	日本人	
満足度（大変満足）	48.1	32.4	43.9	34.7	(%)
支出額	68,633	19,382	65,046	27,866	(円)
宿泊数（公園内）	1.6	1.2	1.4	1.1	(泊)
（公園周辺含）	3.6	2.1	3.4	1.9	(泊)
リピーター率（2回以上）	13.6	63.9	13.7	57.8	(%)
（10回以上）	0.7	19.2	1.0	11.1	(%)

出典：令和元年度「国立公園満喫プロジェクト」推進業務の結果より

(3) 2020年までの主な取組成果

1) アドベンチャートラベル(AT)の推進

アドベンチャートラベル(以下、「AT」という。)を重要なターゲットとして位置づけ、体験・滞在型旅行であるATを北海道の新たなブランドとして定着させる取組を推進し、積極的な誘致活動の展開により、Adventure Travel World Summit(ATWS)の2021(令和3)年北海道開催が決定した。

<ATに関するこれまでの主な動き>



○アドベンチャートラベル（AT）とは

- ATは「自然、アクティビティ、異文化体験の3つの要素のうち2つ以上で構成される旅行」として定義されている。
- ATは地域の自然環境や文化等を資源としていることから、大人数の過剰な利用によりそれらの資源を損なうことなく、それらを保全しながら持続的に活用していくことが重視されている。
- ATTA（Adventure Travel Trade Association）の調査によると、AT旅行者は一人当たりの旅行消費額は通常の旅行者より約1.7～2.5倍高いというデータもあり、より少ない人数の利用で環境負荷を抑えつつ地域の活性化につなげていくことが期待できる。（図7）
- 阿寒摩周国立公園を含むひがし北海道エリアは、国内でも屈指の雄大な自然とそこで体験できるアクティビティ、際立った独自性を持つアイヌ文化を有しており、海外の競合地域と比較しても優位性を持つと考えられている。

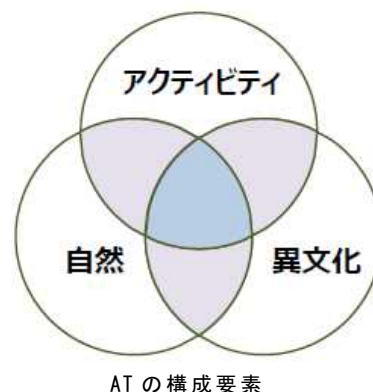
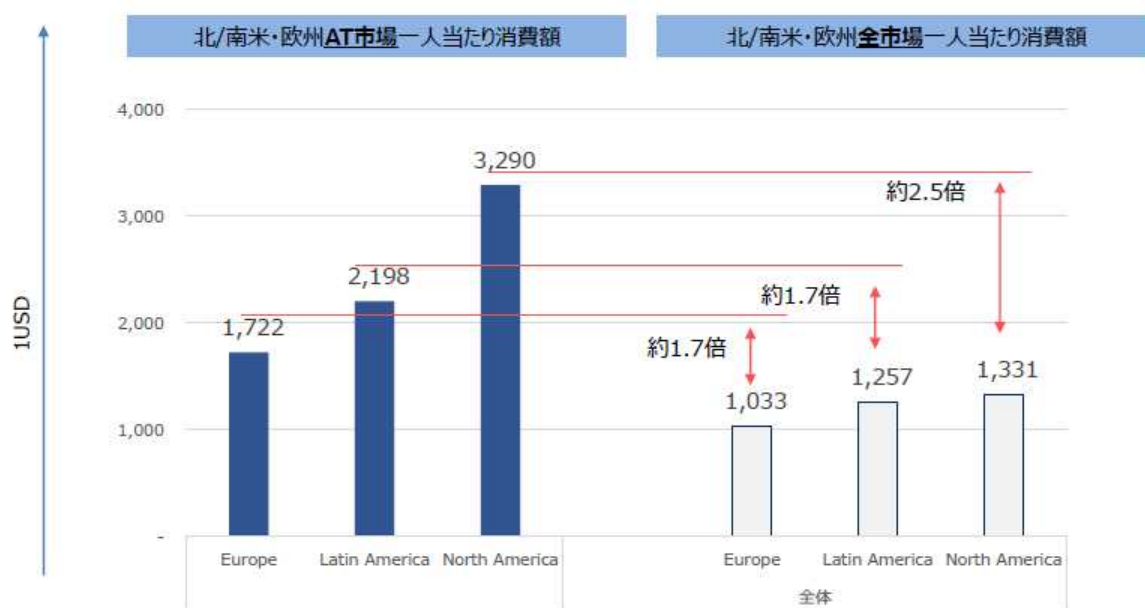


図7 AT市場と全市場の一人あたり消費額の比較



出典：ATTA 資料、Euro-monitor、各種データより北海道経済産業局、JTB 総研作

2) 国立公園の新たな活用

これまで未利用だった国立公園の資源やエリアについて、自然環境の保全も踏まえた新たな活用を推進した。

<新たな活用の例>

■カムイルミナ

- ・2019年7月より、阿寒湖畔ボッケ遊歩道を活用し、アイヌの物語から自然との共生の大切さを伝える、夜のデジタルアートプログラム「カムイルミナ」が開始(約3万4千人が参加)



■アトサヌプリトレッキングツアー

- ・2020年10より、入山禁止となっていたアトサヌプリにおいて、エコツアーリズム推進法に基づくルールを導入したガイド付き限定のトレッキングツアーが開始



■川湯の森ナイトミュージアム

- ・2020年10月に、川湯及び硫黄山において、夜の自然を楽しみながら学習する「川湯の森ナイトミュージアム」を社会実験として実施



■屈斜路外輪山トレイルの整備

- ・美幌地区三町広域観光協議会が屈斜路湖外輪山のトレイル(藻琴山～美幌峠～津別峠)を検討し、調査ルートを整備(2020年)



■裏摩周一神の子池トレイルルート

- ・2019年6月より、裏摩周展望台から神の子池までのガイド付きトレイルを開始(今後MTBコースとしても検討)



■阿寒湖滝口線歩道の整備

- ・阿寒湖南岸を歩き、滝口までつなぐ新たな歩道(滝口線)を整備(2020年度一部区間供用開始)

■マリモ学習ツアー

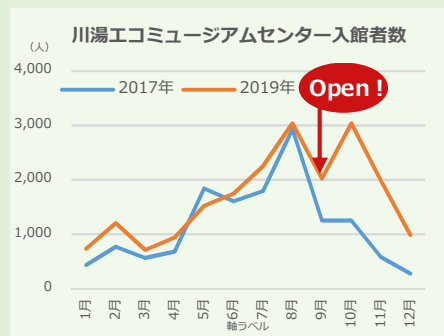
- ・阿寒湖のシンボルであるマリモを体験的に学習できるツアーについて関係者間で議論し、実施内容及び体制を検討(2016～2020年度)

3) 官民連携による民間投資の促進

国立公園満喫プロジェクトを契機として、地域内外からの新たな民間投資を促し、地域の活性化に向けた取組が進んだ。

■川湯エコミュージアムセンター（EMC）の民間カフェ導入

- ・2019年8月より、川湯 EMC の2階に設置したカフェスペースで公募により選定した民間事業者が営業開始



■川湯温泉廃屋撤去後の跡地活用

- ・2020年9月に川湯温泉街の廃屋となったホテル1棟を撤去し、跡地を活用した地域活性化のためのイベントを実施



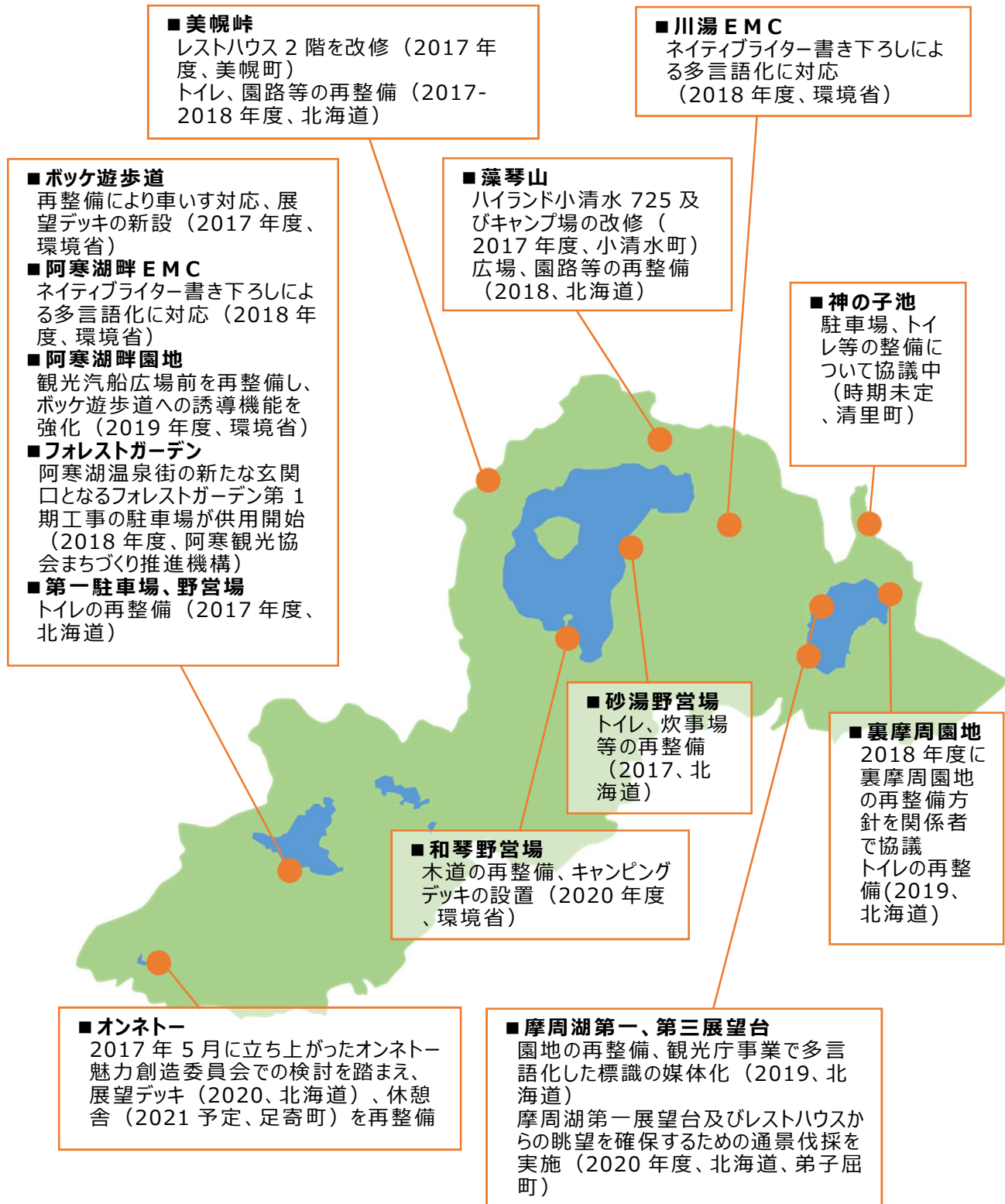
■公設野営場の民間活用（グランピング等）

- ・2018年、2019年に和琴野営場において、民間事業者と連携し、閑散期の有効活用方策の検討としてグランピングを試行
- ・環境省、北海道、弟子屈町で連携協定を締結し、2020年度より弟子屈町内の公設野営場を民間事業者により一括運営



4) 快適な公共空間の整備

多くの旅行者が利用する国立公園内のビジターセンター、園地、トイレ等の公共施設について、ストレスのない快適な利用が出来るよう再整備、多言語対応等を推進した。



（４）今後の課題

これまで満喫プロジェクトとして様々な取組を推進してきたが、世界水準の国立公園として更なる高みを目指すためには、以下の課題についてより一層取組を進める必要がある。

■ マイナスポイントの改善

これまでの取組により、施設整備や官民連携によるサービス向上が図られてきているが、放棄された廃屋、不要になった看板、残置された工作物、景観を阻害する電線などの人工物が、自然の風景を損なっている状況が未だに散見され、国立公園のすばらしい自然よりもがっかりしたマイナスポイントの方が強く印象に残ってしまうおそれがある。新たな施設整備等によるサービス向上も重要であるが、マイナスポイントを減らしていくことがより旅行者の満足度に影響を与えると考えられる。

これらの景観阻害要因は、所有者の確認などの権利関係の整理が必要であったり、撤去にあたり莫大な費用がかかったり、簡単には解決できない問題ではあるが、地域として一つ一つ改善に向けて取り組んでいくことが重要である。



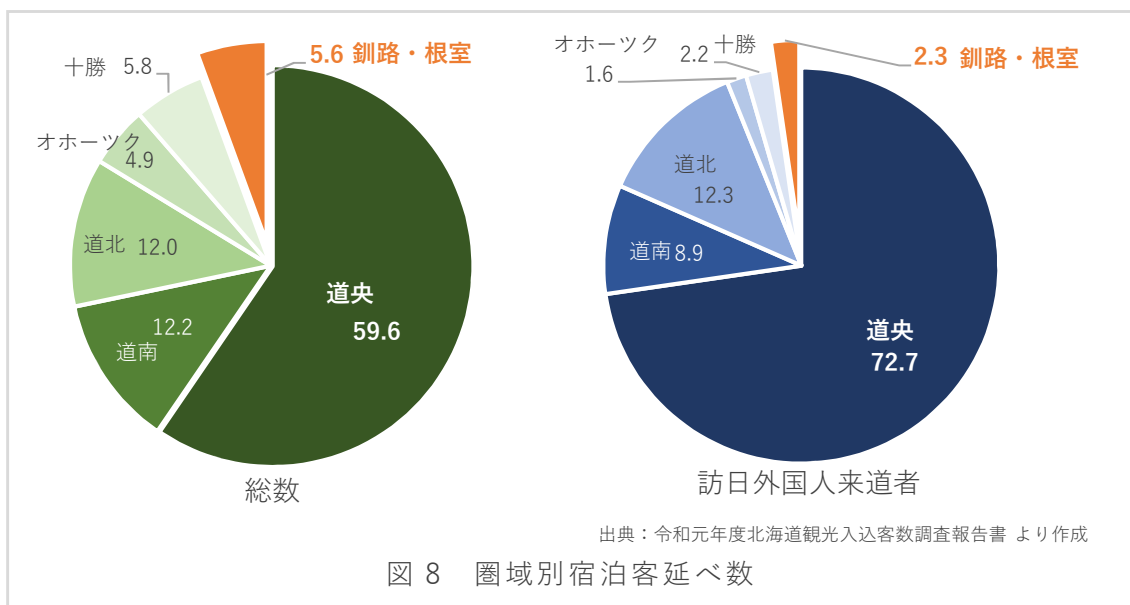
（写真）放棄された廃屋



（写真）景観を阻害する電線

■ 二次・三次交通の充実

現在の北海道観光は道央圏に集中しており、特に訪日外国人では70%以上が道央圏に集中しており、釧路・根室圏にまで訪れる旅行者は2.3%にとどまっている。阿寒摩周国立公園を訪れる訪日外国人の移動分析によると、阿寒摩周国立公園への滞在前後に札幌市や千歳市に滞在している旅行者が多い。このため、阿寒摩周国立公園を含むひがし北海道エリアに利用者を増やすためには、札幌などの道央圏から誘導することが効率的と考えられる。一方で、鉄道・バスなどの公共交通機関による二次交通、三次交通でのアクセスがよくないため、交通手段はツアーバスやレンタカーに偏っているのが現状である。このため、民営化された道内7空港や隣接する中標津空港と連携しながら、公共交通によるアクセスの充実を図っていく必要がある。



■ ツアーオペレーターの育成

阿寒摩周国立公園では様々な事業者が魅力的なツアープログラム等を提供しており、阿寒湖温泉、川湯温泉などの利用拠点においては、多様な宿泊施設が充実している。一方で、土地勘の少ない訪日外国人にとっては、少ない外国語の情報の中から、移動手段も含めて一つのサービスを選択して、旅行の行程を組み立てることは非常に困難である。このため、阿寒摩周国立公園及び周辺地域の様々な事業者の情報を把握し、訪日外国人のニーズに合わせてトータルコーディネートができるツアーオペレーターの役割を担う体制や組織を育成していく必要がある。

また、ツアー全体に一貫したテーマやストーリーを持つことも重要で、個々の観光スポットを単純に巡るのではなく、全体テーマに基づいてそれぞれの場所になぜ連れて行くのか、そこで何を体験できるのかといった目的を明確にすることが重要である。

さらに、こうしたツアーを案内するためには、個別のアクティビティ等を提供する現地ガイドだけでなく、地域の自然や文化等の概要が説明でき、現地ガイドとつながりながら地域内での行程全体を案内できるコーディネーターの役割が求められる。

■ 高品質・高付加価値なサービスの提供

国立公園満喫プロジェクトでは、利用者数だけではなく、消費単価や体験の質の高さ・深さを掛け合わせた「体積」を大きくしていくという視点で取組を進めている。しっかりとしたルールに基づく、ツアープログラム参加者だけの限定的な体験を提供することなどにより、付加価値を高めていくことが重要である。このためには、これまで使われていなかった資源の活用や、新たな方法での利用についても、自然環境を保全しつつ持続可能な仕組みとすることを前提として、積極的に検討を進めていくことが必要である。

また、より上質なサービスを求める旅行者のニーズに対応できる宿泊施設についても、国立公園の大自然を活かしつつ、自然環境への負荷を抑えた立地を考慮して引き続き検討を進める必要がある。

■ 国立公園ブランドの訴求

国立公園満喫プロジェクトの推進を通じて、かつてないほど国立公園（ナショナルパーク）の観光地としてのプロモーションや情報発信を進めてきた。今後はさらに、国立公園を訪れる旅行者に対して、「ナショナルパーク」に行けば、日本国内で一級品の美しい風景や上質な自然体験が保証され、自然と共生する文化や暮らしを体感できるといったブランドイメージを高めていくことが必要である。このためには、まずサービスを提供する地域の事業者や住民に対して、「国立公園」が優れた自然を将来世代にわたって保護していくシステムであり、それにより旅行者へ上質な利用空間を提供し続けることができるという理解を広げていくことが重要である。地域の事業者や住民が、国立公園の自然により地域の産業や暮らしが成り立っていると認識するこ

とで、自ら率先して自然環境の保全と持続可能な利用を担っていくことが期待される。

また、旅行者が国立公園にいることを意識できるように、現在様々な主体により設置され、一体感のない看板・標識類のデザインを統一していくことも必要である。

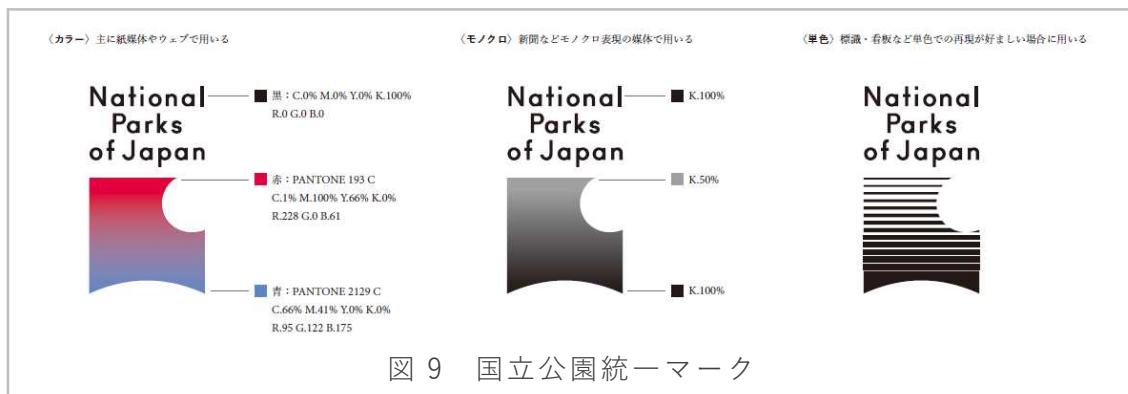


図9 国立公園統一マーク

■ 新型コロナウイルス感染症への対応（国内誘客、感染症対策、平準化等）

新型コロナウイルスの感染拡大により当面はインバウンドの回復が見込めない状況となったため、旅行消費額の約8割を占める国内旅行者について改めて誘客を図る必要がある。その際、従来型の観光旅行の推進だけでなく、ポストコロナ時代の新しい生活様式に対応した旅行形態についても対応を進める必要がある。また、引き続き感染症対策を徹底して旅行者に安心感を与えることで、リピーターの獲得に繋げていくことも重要である。

阿寒摩周国立公園の現在の利用者は、訪日外国人ではアジア圏に集中し、季節変化をみると、訪日外国人では冬、国内旅行では夏に利用者が集中している。新型コロナウイルスの感染拡大のような予想外のリスクに備えるためには、特定の地域や国からの旅行者に集中するのではなく、国内及び海外も含めてバランス良く集客を図っていくことが重要である。また、特定の季節に集中せずにピークを平準化することで、より安定的な観光地経営につながると考えられる。このため、オフシーズンの新たな魅力発見やサービス展開を図ることが重要である。

2. 基本方針

阿寒摩周国立公園におけるこれまでの取組及び課題を踏まえ、今後満喫プロジェクトを推進するにあたっての基本的な考え方、利用に関するコンセプト及び取組の方針等を以下のとおり設定する。

(1) 基本的な考え方

- ・ 国立公園満喫プロジェクトの推進により、阿寒摩周国立公園を世界水準のデスティネーションとしてブランド化していくことで、国立公園及び周辺地域における観光及びそれに関連する産業を活性化させ、地域住民が自分たちの地域に誇りを持ち、そこに住み続けたいと思うような豊かな暮らしができる持続可能な地域づくりを進める。
- ・ 国立公園の自然を将来にわたって保護し続けることを前提に、持続可能かつ国立公園の自然の付加価値を高める上質な方法で積極的に活用していくことで、地域住民がこれまで以上に自然を守ることの重要性を認識するような、保護と利用の好循環の仕組みづくりを進める。
- ・ 海外から多くの旅行者が訪れることで、この地域に根ざすアイヌ文化をはじめとする自然との共生の文化を世界に発信し、国立公園への観光を通じて持続可能な社会のあり方を示していく。

（２）利用推進の方向性

基本的な考え方を踏まえ、阿寒摩周国立公園が推進する利用の方向性及び具体的な楽しみ方のイメージを以下のとおり示す。

3つのカルデラと湖、 そして原生自然から感じとるカムイの存在

～阿寒摩周国立公園の楽しみ方～

- 世界唯一の球状マリモの群生地である阿寒湖、世界レベルの透明度を誇る摩周湖、世界最大規模のカルデラ湖である屈斜路湖、それらを包むように広がる深い森、今なお活発な火山の山々、そこに息づく動物たち、それらが織りなす原生的な自然の世界を存分に堪能する。
- 火山現象を間近に見ながら楽しめるトレッキング、「カムイの聖地」釧路川や湖でのカムイ、爽快に駆け抜けながら変化する景色を楽しむサイクリング、眺望のよい峠から雲海や星空を観察するツアー、湖畔や川辺でのバードウォッチングなど、ローインパクトなアクティビティを通じ、原生的な自然の雄大さや偉大さ、パワー、生きもののたくましさに直接ふれる。
- 眺望や居心地のよい宿泊施設、展望施設、カフェでの滞在、それぞれ特色の異なる温泉での保養、静寂な森の中でのグランピング、自然につつまれた環境でリラックスして働くワーケーションなど、優れた景観や大自然の魅力を実感しながらここでしか得られない上質な時間をゆっくりと過ごす。
- 我が国の先住民族であるアイヌ民族の伝統文化や思想にふれ、自然と共生する持続可能な社会のあり方を考える。

（３）取組の方針

- ・ 2021（令和 3）年の ATWS 北海道開催とその後の展開を見据え、AT を主要なターゲットの一つと定め、AT のニーズに対応できるガイドツアーやサービスの充実を図る。
- ・ 世界的に SDGs への取組が求められ、旅行先の選択にあたっても持続可能性が重視されていることを踏まえ、アイヌ文化をはじめとした世界に誇る自然との共生の文化を発信する拠点として、サステイナブルツーリズムの考えに基づく取組を推進する。
- ・ ウィズコロナ・ポストコロナの時代への対応を踏まえ、地域内観光などの国内誘客を強化するとともに、ワーケーションや多拠点居住などの新たなライフ＆ワークスタイルに対応した観光旅行以外の利用価値を提供する。
- ・ 自然環境の保全を前提としつつ、一定の制限の下での限定的な利用などにより、高品質・高付加価値な新たな国立公園の活用を積極的に進めることで、民間による新たな事業展開を促進する。
- ・ 新たな事業を進めるだけでなく、廃屋化して放置された施設、不要になった看板、電線等の景観を阻害する人工物を取り除く“引き算の景観改善”により旅行者の満足度を高める。
- ・ 阿寒摩周国立公園内だけでなく、周辺地域とも連携し、ひがし北海道エリアを意識した広域的な取組を推進する。

(4) ターゲット

1) 訪日外国人旅行

訪日外国人は現在アジア圏に集中していること、利用者数だけでなく消費額・宿泊数などを向上させる必要があることなどが、阿寒摩周国立公園の課題であることから、近年、欧米豪を中心に市場規模が急速に拡大しているアドベンチャートラベラーを主要なターゲットとする。ただし、予想できない様々なリスクを回避するためには多様な国や地域から観光客が訪れることが望ましく、2025（令和 7）年までの中期的な取組の中で注力すべきターゲットを示したものであり、現在訪日外国人の多くを占めるアジア圏についても、引き続き現在の利用者数を維持していくための取組は継続する必要がある。

AT では、旅行者の趣向に応じて、徹底的に冒険的な活動を求める「Adventure Intensive」、文化体験などにより新たな学びを求める「Cultural Explorer」、快適に様々なアクティビティを楽しむ「Experience Sampler」の3つのターゲットに分類している。阿寒摩周国立公園は、比較的アクセスがよく様々なタイプの自然が近距離で楽しめること、独特の世界観を持つアイヌ文化が根付いていることなどから、特に「Cultural Explorer」と「Experience Sampler」をターゲットとしてコンテンツの充実やプロモーションを実施することが効果的である。（表 2）

表 2 AT の 3 つのターゲット分類

Adventure Intensive	Cultural Explorer	Experience Sampler
自分の限界に挑戦するような冒険的な体験を求め、そのためにはある程度の不便さも許容するグループ	文化体験や新しい知識に最も関心があり、自然や風景を楽しみながら旅行に学びを求めるグループ	新しい学びや経験を求め、様々なタイプのアクティビティを体験しながら快適に旅を楽しむグループ
		

2) 国内旅行

旅行者の8割以上を占める国内旅行についても重要であり、特に地域内の利用客に国立公園の資源が再発見され、近隣から何度も繰り返し訪れてくれるリピーターを増やすことで、安定的な集客につながると期待される。

また、オフィスに縛られづらい業種の民間企業等をターゲットとして、ワーケーションなどの新たな利用を推進し、国立公園の新たな利用価値を提供する。

3. 目標

上記の基本方針を踏まえつつ、2025（令和 7）年までの当面の目標として、容易に計測可能、かつ、取組の推進によって改善可能と考えられる数値目標を以下のとおり設定する。

- ・ステップアッププログラムでは、2020（令和 2）年に阿寒摩周国立公園関係市町訪日外国人延べ宿泊者数を 31 万人とすることを目標としていたが、新型コロナウイルスの感染拡大を受けて目標達成ができなかったことから、引き続き目標値を維持しつつ 2025（令和 7）年までのできるだけ早期に目標を達成することとする。（目標 1）
- ・訪日外国人の需要回復に時間がかかることを踏まえると、地域の観光産業を維持していくためには国内需要をしっかりと維持していくことも重要であることから、国内旅行者についても 2019（令和元）年度の水準を引き続き維持しつつ、近隣地域からのリピーターを増加させていく。（目標 2、3）
- ・滞在日数が増えることで地域内での消費額も増加すると考えられるため、阿寒摩周国立公園での連泊での利用者数を増やしていく。（目標 4）
- ・予測不可能なリスクに対応し、安定的な観光地として将来にわたって持続していくため、様々な国・地域からバランス良く集客を図るとともに、繁閑差を解消していく。（目標 5、6）
- ・阿寒摩周国立公園の周辺地域への波及効果を高めていくことも重要であることから、周辺地域の主要施設の利用者数等を増加させていく。（目標 7）

目標 1 関係市町訪日外国人宿泊客延べ数：31 万人

目標 2 関係市町（釧路市は旧阿寒町のみ）宿泊客延べ数：80 万人

目標 3 国内旅行者リピーター率（10 回以上）：25%

目標 4 連泊利用者数：15 万人以上

目標 5 訪日外国人国別割合（欧米豪比率）：10%

目標 6 季節繁閑差（最多月宿泊数／最小月宿泊数）：2 倍以下

目標 7 阿寒摩周国立公園内外の主要施設の利用実績：増加

表 3 2019（令和元）年度市町村別宿泊者数

		釧路市			標茶町	弟子屈町	白糠町	足寄町
			旧阿寒町					
訪日外国人宿泊客延数（人泊）		140,046	97,882		60	25,775	38	417
（内訳）	アジア	118,790	86,606		41	20,893	25	186
	欧米豪	9,018	3,632		7	2,871	2	159
	その他	12,238	7,644		12	2,011	11	72
宿泊客延数（人泊）		1,476,600	525,500		20,600	211,200	10,100	22,200
		美幌町	津別町		清里町	小清水町	大空町	中標津町
訪日外国人宿泊客延数（人泊）		83	324		1,128	0	57	2,662
（内訳）	アジア	42	206		820	0	0	1,742
	欧米豪	32	69		164	0	52	662
	その他	9	49		144	0	5	258
宿泊客延数（人泊）		17,100	11,800		19,700	4,600	16,200	63,200
11 市町合計					11 市町合計 （釧路市は旧阿寒町のみ）			
訪日外国人宿泊客延数（人泊）[b]		170,590（①）			128,426			
（内訳）	アジア	142,745		83.7%	110,561		86.1%	
	欧米豪	13,036		7.6%（⑤）	7,650		6.0%	
	その他	14,809		8.7%	10,215		8.0%	
宿泊客延数（人泊）[a]		1,873,300			922,200			
国内宿泊客延数（人泊）[a-b]		1,702,710			793,774（②）			
宿泊客実数（人）[c]		1,672,400			844,600			
連泊利用者数※（人）[a-c]		200,900			77,600（④）			
平均宿泊数（泊）[a/c]		1.12			1.09			

※それぞれの市町内での連泊数であり、連泊日数は 2 泊として計算

出典：北海道観光統計及び釧路振興局観光入込客数より

表 1（再掲） 阿寒摩周国立公園訪問者の旅行の質に関する指標

	阿寒摩周		8 公園平均		
	外国人	日本人	外国人	日本人	
満足度（大変満足）	48.1	32.4	43.9	34.7	（％）
支出額	68,633	19,382	65,046	27,866	（円）
宿泊数（公園内）	1.6	1.2	1.4	1.1	（泊）
（公園周辺含）	3.6	2.1	3.4	1.9	（泊）
リピーター率（2 回以上）	13.6	63.9	13.7	57.8	（％）
（10 回以上）	0.7	19.2（③）	1.0	11.1	（％）

出典：令和元年度「国立公園満喫プロジェクト」推進業務の結果より

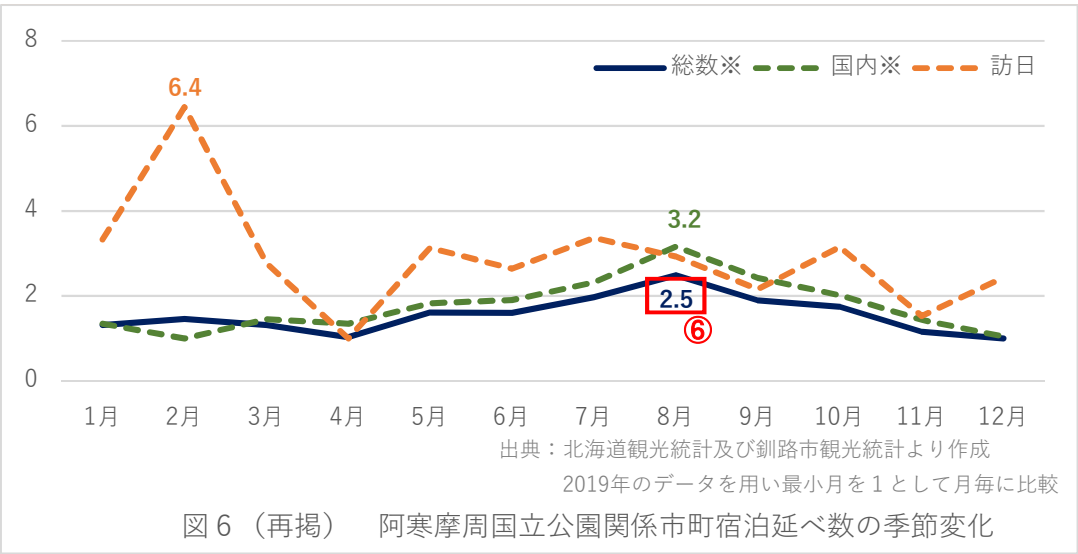


表 4 阿寒摩周国立公園内外主要施設等の利用実績

施設名	市町	利用実績の 種類	実績値	年次	備考
(国立公園内主要施設)					
阿寒湖畔エコミュージアムセンター	釧路市	利用者数	54,729 人	2019 年度	
阿寒湖アイヌシアター「イコロ」	釧路市	利用者数	54,664 人	2019 年度	
マリモ展示観察センター	釧路市	利用者数	89,954 人	2019 年度	
川湯エコミュージアムセンター	弟子屈町	利用者数	17,574 人	2019 年度	
摩周湖レストハウス	弟子屈町	利用者数	643,854 人	2019 年度	駐車台数を 基に算出
硫黄山レストハウス	弟子屈町	利用者数	220,736 人	2019 年度	駐車台数を 基に算出
ハイランド小清水	小清水町	利用者数	3,197 人	2019 年度	
(道の駅)					
道の駅 阿寒丹頂の里	釧路市	利用者数	412,825 人	2019 年度	
道の駅 摩周温泉	弟子屈町	利用者数	292,491 人	2019 年度	交流館、ト イレ棟、直 売所のうち 最も多い数 値
道の駅 しらぬか恋問	白糠町	利用者数	576,814 人	2019 年度	
道の駅 あしょろ銀河ホール 21	足寄町	利用者数	247,144 人	2019 年度	
道の駅 ぐるっとパノラマ美幌峠	美幌町	利用者数	550,982 人	2019 年度	
道の駅 あいおい	津別町	利用者数	147,963 人	2019 年度	
道の駅 パパスランドさつつる	清里町	利用者数	208,690 人	2019 年度	
道の駅 葉菜野花小清水	小清水町	利用者数	311,299 人	2019 年度	トイレ・レ ストラン・ 土産店の合 計
道の駅 メルヘンの丘 めまんべ つ	大空町	利用者数	435,945 人	2019 年度	ショップ、 トイレの合 計
道の駅 ノンキーランド ひがし もこと	大空町	利用者数	327,870 人	2019 年度	レストラ ン、ショッ プ、ホテル、 トイレの合 計

表 4（続き） 阿寒摩周国立公園内外主要施設等の利用実績

施設名	市町	利用実績の 種類	実績値	年次	備考
（公設キャンプ場）					
阿寒湖畔キャンプ場	釧路市	宿泊者数	3,490 人	2019 年度	
オンネトー国設野営場	足寄町	宿泊者数	1,889 人	2019 年度	
和琴野営場（RECAMP 和琴）	弟子屈町	宿泊者数	1,635 人	2019 年度	
砂湯野営場（RECAMP 砂湯）	弟子屈町	宿泊者数	5,535 人	2019 年度	
桜ヶ丘キャンプ場（RECAMP 摩周）	弟子屈町	宿泊者数	1,851 人	2019 年度	
ハイランド小清水キャンプ場	小清水町	宿泊者数	249 人	2019 年度	
（その他の主要観光施設）					
津別峠展望施設	津別町	入込数	93,215 人	2019 年度	
ノンの森ネイチャーセンター	津別町	入込数	15,237 人	2019 年度	
多和平	標茶町	利用者数	18,612 人	2019 年度	
開陽台	中標津町	利用者数	113,696 人	2019 年度	

4. 行動計画

(1) 重点的な取組

1) ウィズコロナ・ポストコロナ時代への対応

新型コロナ感染拡大の影響を受け、観光業界は甚大な影響を受けているが、国立公園の利用を担うツアーや宿泊等の事業者なくしては、地域の暮らしは成り立たないため、雇用の維持や人材育成を優先課題として進める。

当面はインバウンドの回復が見込めないため、国内誘客を強化し、地域の資源として地域の利用客に再発見されることを目指し、地域内観光の受け皿として国立公園の価値を再構築していく。密を避けられる感染リスクの低い自然の中で、さらに、地域で連携しながら感染症対策を徹底することにより、安全・安心な観光地としてのイメージを定着させ、リピーターの獲得に繋げていく。

また、国立公園の豊かな自然環境の中に身をおくことで、気持ちがリフレッシュできて仕事の生産性が向上したり、クリエイティブな発想が生まれたり、ワーケーションやリモートオフィスなど従来の観光旅行以外の利用も注目されている。こうしたライフ&ワークスタイルの転換を踏まえ、長期的には「国立公園へ行こう」から「国立公園で暮らそう」というような、多拠点居住や移住も視野に入れた、国立公園の新たな価値を発信する。

該当する主な施策

- KA-1 川湯温泉の再生及び新たな魅力のブランド化（弟子屈町、環境省、摩周湖観光協会、川湯地域運営協会）
- KU-1 屈斜路湖の魅力を引き出す高付加価値で新たな利活用（弟子屈町、北海道（釧路総合振興局）、環境省、林野庁（根釧西部森林管理署）、摩周湖観光協会）
- NP-2 プロモーションおよび効果的な情報発信の実施（環境省）

2) ひがし北海道における AT の推進

主要なターゲットである AT 旅行者のニーズにあったコンテンツの開発、施設整備、情報発信、人材育成等を関係者の連携の下に総合的に推進する。

また、海外から北海道に訪れる旅行者は、阿寒摩周国立公園内だけでなく周辺も含めて広域に移動していると考えられるため、知床国立公園、釧路湿原国立公園など周辺の国立・国定公園やバードウォッチング等の野生生物を活用したコンテンツなども含めて連携していくことが重要である。このため、ひがし北海道の中心に位置する阿寒摩周国立公園においては、周辺地域も含めた旅行の情報の提供、二次交通などでの快適なアクセスの確保などにより、このエリアで AT を満喫する際のハブ機能を果たしていく。

また、FAM トリップを企画する際に阿寒摩周国立公園を中心として周辺の国立・国定公園等も含めて行程を検討するなど、周辺自治体との連携を進めていく。

該当する主な施策

AK-4 阿寒湖畔 EMC のインバウンド対応機能強化（環境省）

AK-11 阿寒湖における AT の推進（阿寒観光協会まちづくり推進機構、釧路市）

KA-2 川湯 EMC のインバウンド対応機能強化（環境省）

BA-6 アドベンチャートラベルの推進（国土交通省北海道運輸局、環境省、経済産業省北海道経済産業局、北海道）

3) 官民連携による利用拠点の再生

全国の国立公園において、過去に団体旅行に依存した大規模施設等が、個人旅行など現在のニーズに合わせた設備更新への投資や適正規模への投資ができないまま老朽化が進み、休廃業に追い込まれる宿泊施設等が後を絶たない。こうした施設が廃屋として放置されることは、旅行者に衰退した観光地の印象を与え、地域の魅力や活力を失わせる。特に自然の風景そのものが価値である国立公園においては、廃屋によりその価値が損なわれることは深刻な問題である。こうした問題を受け、環境省では 2018（平成 30）年 9 月に「国立公園の宿舎事業のあり方について」を

とりまとめ、新たな民間投資の誘致も含め官民連携により廃屋の撤去や無電柱化、景観デザインの統一等の面的再整備に取り組むことの重要性が示された。

阿寒摩周国立公園においても、廃屋の撤去、無電柱化の推進、統一デザインの導入によるまちなみ景観の改善等による地域づくりのビジョンを示したマスタープランを作成することなどにより、新たな民間投資を呼び込み、官民連携による面的な再整備を進めていく。

また、川湯エコミュージアムセンターへの民間カフェ導入のように公共施設等の民間開放を進めることにより、官民連携でのサービスの向上にも積極的に取り組む。

該当する主な施策

- AK-1 阿寒湖温泉街のまちなみ景観改善及び快適な利用空間の整備
(釧路市、阿寒観光協会まちづくり推進機構、阿寒湖温泉地区景観協議会、環境省)
- ON-1 オンネトー国設野営場休憩舎整備(足寄町、あしよろ観光協会、環境省、林野庁(十勝東部森林管理署))
- KA-1 川湯温泉の再生及び新たな魅力のブランド化(弟子屈町、環境省、摩周湖観光協会、川湯地域運営協会)
- KA-4 摩周湖第一展望台及び硫黄山レストハウスのリニューアル(弟子屈町、REVIC、北海道、環境省、自然公園財団川湯支部)

4) 阿寒摩周国立公園トレイルネットワークの形成

ATなどの欧米豪の旅行者は、自然の中を長距離歩いて楽しむというスタイルの旅行を好む傾向がある。国立公園内のトレイルを充実させていくことで、長期に滞在しながらゆっくりと国立公園の自然を満喫する、欧米豪の旅行スタイルに対応することができる。このため、まずは、国立公園内の既存のトレイルについて、見所や所要時間、レベル、入口までのアクセスなどを示したマップにより情報発信を行うとともに、「トレイルガイドライン」に基づき、統一感のある道標整備を段階的に進めることで、国立公園の歩道としての一体感や利用者の安心感を高めていく。

また、「トレイルネットワーク構想」に基づき、阿寒摩周国立公園内の

トレイルをネットワークとしてつないでいくとともに、将来的にはひがし北海道の3空港（釧路、女満別、中標津）間を歩けるロングトレイルとしてつなげていくことを目指す。トレイルのセクション毎の宿泊拠点の整備や自転車、カヌー等での接続、二次交通との連携なども進める。

該当する主な施策

- KA-5 摩周・屈斜路トレイル（MKT）ルート of 拡充と利用推進（弟子屈町、環境省、摩周湖観光協会、地域事業者、林野庁（根釧西部森林管理署）、北海道（釧路総合振興局）
- KU-2 屈斜路カルデラ外輪山トレイルルート整備調査事業（美幌地区三町広域観光協議会、環境省、林野庁（網走南部森林管理署、根釧西部森林管理署））
- BA-3 ひがし北海道3空港をつなぐロングトレイルの推進（環境省、林野庁（関係森林管理署）、国土交通省北海道運輸局、関係自治体、観光協会）

5）自然の付加価値を高める新たな利活用

国立公園は優れた自然の保護と利用の両方を目的としており、自然環境の保護を前提としつつ、持続可能な方法で利用し、地域の活性化に貢献していくことが求められている。阿寒摩周国立公園では、2020（令和2）年までの満喫プロジェクトにおいて、阿寒湖でのカムイルミナ、川湯の森ナイトミュージアム、アトサヌプリトレッキングツアーなど、これまで未利用だったエリアや方法について、新たな利用に積極的に取り組んできた。

引き続きマリモ学習ツアー、屈斜路湖中島の活用、トレイルのマウンテンバイク利用など、国立公園の資源の新たな活用について、一定の制限の下での限定的な体験とすることで持続可能かつ高付加価値なサービスとなるよう検討を進める。

該当する主な施策

- AK-2 阿寒湖の自然を体験的に学ぶプログラムの開発（阿寒観光協会まちづくり推進機構、環境省、前田一歩園財団）
- AK-3 アイヌ文化のブランディングとプロモーションの実施（阿寒観

	光協会まちづくり推進機構、阿寒アイヌ工芸協同組合)
MA-3	裏摩周展望台-神の子池トレイルルートにおけるツアー・プログラムの開発及びガイド付ツアーの確立（きよさと観光協会、清里町）
KU-1	屈斜路湖の魅力を引き出す高付加価値で新たな利活用（弟子屈町、北海道（釧路総合振興局）、環境省、林野庁（根釧西部森林管理署）、摩周湖観光協会）

6) 利用者目線での簡易な改善への早急な対応

調整や工事等に時間のかかる大きな施設整備だけでなく、看板の多言語化や景色のよい場所でのベンチの設置、利用動線の明確化など、利用者目線に立てば誰でも分かる不満の解消を現場でしっかりと考えて、早急に対策を行うことが重要である。多言語化についてはネイティブライターによる書下ろしとすることなどにより、外国人目線で興味関心のあつた内容を適切な表現で書いた質の高い解説を充実させていく。

また、旅行者が国立公園にいることを意識できるように、阿寒摩周国立公園への入口標識を充実させるとともに、道路沿いの景観改善を図り、各主体で設置する看板・標識類のデザインを統一していくことで、国立公園としてのブランド化を図る。

利用者目線での基本的な施設の簡易な改善については、主要な利用施設の対応状況について進捗状況を把握しながら、各主体において着実に進めていく。

該当する主な施策	
AK-12	自然体験拠点施設等の魅力向上（釧路市）
ON-2	オンネトー湯の滝園地の再整備（北海道（十勝総合振興局）、環境省、足寄町、オンネトー魅力創造委員会）
MA-2	神の子池周辺の整備について（清里町）
MA-4	摩周湖第一園地の施設充実化（北海道（釧路総合振興局）、環境省、弟子屈町、林野庁（根釧西部森林管理署））
NP-1	看板・標識類のデザイン統一及び多言語化によるブランド力の向上（環境省、関係自治体、林野庁（関係森林管理署）、国土交通省北海道運輸局、広域観光協議会）

BA-1 「秀逸な道」による道路景観の確保（国土交通省北海道開発局、関係自治体）

7) 持続可能な観光の推進

本ステップアッププログラムでターゲットとする AT に参加する旅行者はサステナビリティへの意識が高く、自分たちが楽しむフィールドが持続可能な方法で管理されていることだけでなく、提供されるサービスが脱炭素であることや、プラスチックゴミを排出しないことなどが求められる。国際的に SDGs 達成に向けた気運が高まっており、消費者の行動もより持続可能な商品やサービスを選択するよう変化してきている。

こうした社会の新たな流れに対応する必要がある、また、我が国を代表する優れた自然環境を有する国立公園という地域であることから、率先して持続可能な観光の実現の取り組みを進めることが重要である。

このため、観光分野での SDGs 達成への寄与を目指した、持続可能な観光に関する国際的な認証プログラムである GSTC (Global Sustainable Tourism Council) の基準に準拠した取り組みを推進する。また、国立公園内で暮らす住民や事業者に対し、豊かな自然環境を基盤として自らの生活や事業が成り立っていることについて理解を促し、将来世代にわたり持続的に活用していくための仕組みづくりを進める。

国立公園内の利用施設や交通等における再生可能エネルギーの活用、EV の導入等により脱炭素化を推進するとともに、リユース容器の活用や公共施設による提供商品の見直し等を通じてプラスチックゴミの削減を推進する。

該当する主な施策

NP-3 脱炭素化及びプラスチックゴミの削減等の推進・支援（環境省、自然公園財団川湯支部、自然公園財団阿寒湖支部）

BA-4 阿寒摩周国立公園におけるインナーブランディングの推進（環境省、広域観光協議会）

(2) 個別の取組

基本方針を踏まえ、別表に記載した取組を進める。具体的な取組内容は取組個票を参照。個票に記載したエリアの分け方は以下のとおり。

エリア名称	範囲・特徴
阿寒湖	阿寒湖を中心とする周辺の山岳及び森林や温泉街からなるエリア
オンネトー・雌阿寒岳	オンネトー及び雌阿寒岳を中心とする国立公園の西端のエリア
川湯温泉・硫黄山	川湯温泉及びその源泉となる硫黄山を中心とする火山と温泉街からなるエリア
摩周湖	摩周湖を中心とした外輪山の展望台等や神の子池を含むエリア
屈斜路湖	屈斜路湖畔及び屈斜路カルデラ外輪山からなるエリア
阿寒摩周国立公園全体	阿寒摩周国立公園の区域内全体のエリア
公園区域外も含む広域	阿寒摩周公園全体及び周辺市町村、他の国立公園などの公園区域外も含む広域のエリア

5. 効果検証及び取組の改善

(1) 進捗状況の確認

目標として設定した数値については、各種統計等により毎年数値を把握し、取組の効果を把握する。

また、阿寒摩周国立公園満喫プロジェクト地域協議会を定期的に行い、ステップアッププログラムにおける各取組個票に基づき進捗状況を把握し、それらの効果の検証を行う。

(2) 取組へのフィードバック

定期的な進捗確認を行い取組の効果を検証するとともに、必要に応じてステップアッププログラムを随時見直して、新たな取り組みの追加や変更等の改善を行う。